

ムスリム女性と現代アート ——マンチェスター大学ウィットワース美術館の 企画展に関する一考察——

小 牧 幸 代

Muslim Women and Contemporary Art — A Consideration of the Exhibition at the Whitworth Art Gallery, Manchester —

KOMAKI Sachiyo

要 旨

本稿の目的は、マンチェスター大学ウィットワース美術館で2019年に開催された企画展「信仰を越えて：今日のムスリム女性アーティスト」の展示内容の分析を通して、英国におけるムスリム女性アーティストの作品の見せ方について考察することにある。この企画展ではムスリム女性アーティストの作品が、彼女たちの私物やお気に入りの他のアーティストの作品とそれについてのコメント、さらに生い立ちに関する語りなどとともに展示された。美術展でありながら、博物館のような解説にあふれた展示を、私たちはどのように受け止めればよいのか。この問いに加えて本稿では、英国で美術教育を受けたムスリム女性アーティストが、ムスリム女性アーティストとして作品を制作し展示し、それについて語ることの意義についても検討していく。

Abstract

The aim of this paper is to consider how the Muslim female artists' artworks were presented in the UK through an analysis of the exhibition entitled Beyond Faith: Muslim Women Artists Today, which was held in 2019 at the Whitworth Art Gallery, Manchester. In this exhibition, the artworks of Muslim female artists were exhibited together with their personal belongings, favorite artists' artworks with their comments, and stories about their upbringing and experiences. What impressed me at the exhibition was the display with a lot of explanation like a

museum. How should we think about such an exhibition full of commentary? In this paper, the author also considers the significance that the Muslim female artists who received art education in the UK produce and exhibit the artworks and talk about themselves.

I. はじめに

本稿の目的は、マンチェスター大学ウィットワース美術館で2019年に開催された企画展「信仰を越えて：今日のムスリム女性アーティスト」(Beyond Faith: Muslim Women Artists Today)の展示内容の分析を通して、英国におけるムスリム女性アーティストの作品の見せ方について考察することにある。この企画展ではムスリム女性アーティストの作品が、彼女たちの私物やお気に入りの他のアーティストの作品とそれについてのコメント、さらに生い立ちに関する語りなどとともに展示された。美術展でありながら、博物館のような解説にあふれた展示を、私たちはどのように受け止めればよいのか。そのヒントは、この「信仰を越えて」展が公的機関が助成金を出した学術研究プロジェクトの成果発表も兼ねていたことにある。しかも、この企画展はマンチェスター大学が毎年、社会的責任を果たした研究プロジェクトを表彰するメイキング・ア・ディファレンス賞の受賞候補にもなった。つまり、それは単なる美術展以上のもの、すなわちアーティストと研究者の協働による「参加型アート」ないし「ソーシャリー・エンゲージド・アート」のプロジェクトだったのである。

美術史研究者・美術批評家のクレア・ビショップによれば、1990年代初頭以降、参加と協働、およびグローバルな場のマルチチュードへの芸術的関心の高まりによって、様々な名称で表現される参加型アートのプロジェクトが、世界各地で開催されるようになった(ビショップ 2016: 11)。そうしたプロジェクトには「有限の物的対象としての芸術表現から離れ、可変＝継続的な特性、ポスト・スタジオ的なもの、リサーチ方式、社会過程、長い期間をかけて拡張していくもの、そして柔軟性を形式とするものへの移行を希求する」という特徴がある。そして、この文脈においてプロジェクトという語は、「コレクティブなプラクティス、活動家たちの自治組織、領域横断的なリサーチ、参加型アート、ソーシャリー・エンゲージド・アート、そして実験的なキュレーティング」など、さまざまな芸術活動を包括する概念となった(ビショップ 2016: 299)。

他方、ビショップが参加型アートと総括するプロジェクトに含まれたり並記されたりするソーシャリー・エンゲージド・アートとは、キュレーターでありエデュケーターでもあるパブロ・エルゲラが提唱した概念であり、「社会的相互行為なしに成立しない」アートを指す(エルゲラ 2015: 30)。日本でも「アートを契機として、市民が都市や地域と関わりながら、人々の参加を促し、社会をより良くすることを目指すプロジェクト」としてアートプロジェクトが各地で開催されている。多くの場合、それらはプロジェクトを牽引する「アーティストの所属する大学や地方自治体が協力し、国や企業などの助成金を受けて実施」されるが、「目標を達成することよりも、

プロセスと継続性が重視されることが多い」という特徴がある（鷲田 2009: 237）。

本稿で取り上げる「信仰を越えて」展は、こうした参加型アートないしソーシャリー・エンゲージド・アートに分類できるアートプロジェクトであるが、参加者はアートに疎い一般市民ではなく、無名に近いとはいえ訓練を受けた、あるいはアーティストとしてのキャリアをもつ5人のムスリム女性アーティストと数名の研究者である。もう少し特定するなら、それはアジア系のムスリム女性アーティストと英国およびヨーロッパのキリスト教徒の女性研究者との協働に基づくアートプロジェクトであった。このメンバー構成は、いったい何を示唆するのだろうか。また、彼女たちはアートプロジェクトを通じて、どのように「信仰を越えて」いくのか。

キューバの現代アートに関する論文の中で細谷は、ジェイムズ・クリフォードの『文化の窮状』（2003）における議論などを参照し、次のように論じている。かつて、非西洋の作品は美術品として扱われなかった。第三世界の美術に未開、部族、民族、民俗などの形容詞をつけることで、欧米の美術とは並列することができない、特殊な美術として位置づけられるということもおこなわれてきた。しかし、現在では現代美術の世界で多くの第三世界出身のアーティストたちが活躍するに至っている。そして、彼らの作品が高額で取引されるようになってきた（細谷 2014:123-124）。

確かに最近では、欧米の白人男性アーティストの作品に比べて価格面での評価が低かった第三世界出身のアーティストや移民アーティスト、女性アーティストの作品が、まだ十分とは言えないものの、美術市場での評価を高めている。本稿では、こうした議論や社会情勢を念頭に置きつつ、マンチェスター大学ウィットワース美術館で開催された「信仰を越えて」展の展示内容を詳しく見ていく。そして、美術展でありながら、博物館のような解説にあふれた展示のあり方を、アートプロジェクトの理想に照らして考察するとともに、英国で美術教育を受けたムスリム女性アーティストが、ムスリム女性アーティストとして作品を制作し展示し、それについて語ることの意義についても検討する。

II. 「信仰を越えて：今日のムスリム女性アーティスト」展

南北に細長い形状のマンチェスター市の南部にマンチェスター大学の広大なキャンパスがあり、その部分をなすウィットワース公園の一角にウィットワース美術館は位置している。美術館の東側のオックスフォード通り（ウィルムズロー通り）を北に向かって800メートルほど歩けばマンチェスター博物館、逆に南に500メートルほど下ればパキスタン系をはじめとしたアジア系ムスリムが経営するハラールレストランや、エスニックな食材・総菜・パン・菓子・服飾雑貨・金銀細工を売る店が軒を連ねるエスニックエリア「カレーマイル」(Curry Mile)に到達する¹⁾。「信仰を越えて：今日のムスリム女性アーティスト」展は、このウィットワース美術館の1階の展示室で、2019年6月14日から11月10日にかけて開催された²⁾。同展のパンフレットによれば、こ

の展覧会は、マンチェスター大学のSaskia Warren博士が率いる大規模なリサーチ・プロジェクト「英国の文化創造産業におけるムスリム女性の地理学」の一部であり、芸術人文研究審議会の助成金によって開催されたものである。展示スペースには次のような紹介文が掲示されており、同展のパンフレットにも同じ文章が掲載されている。

「この展覧会は、イングランド北西部で活動している、または教育を受けた5人のムスリム女性現代アーティストRobina Akhter Ullah、Shabana Baig、Fatimah Fagihassan、Aida Foroutan、Usarae Gulの合同展である。昨年、一年かけて5人のアーティストは、個人のポートフォリオやウィットワース美術館のコレクションから作品を選定した。自分自身の声で話しながら、彼女たちはアイデンティティ、文化、他者性、帰属、そして信仰を越えて合同の作者性を創出するというテーマに取り組んだ。

ムスリム女性は、宗教的な保守主義、犠牲、隷属性を強調するネガティブなメディアステレオタイプの主題となってきた。反対に、ここで展示される作品は、多様な創造媒体を通して、もっと複雑なストーリーを語る。それらは、アーティストたちの多様な個人的経験と豊かな芸術的旅程を映し出している。

『信仰を越えて』展はマンチェスター大学の人文地理学の上級講師であるSaskia Warren博士が率いる芸術人文研究審議会のプロジェクトの最終到達点である。英国の文化創造産業におけるムスリム女性の役割や経験を探究しつつ、このプロジェクトは表象や美術界の排他性についての重要な問題を提起する。それはウィットワース美術館を含んでいる。ここでアーティストたちは社会的な不平等に挑み過小表象されている人びとに光を当てるための空間を開いてきたのである」

さて、この展覧会に合わせて制作された短編映画には、個々のアーティストの語りやパフォーマンスが収められている。制作者はRicardo Vilela氏であり、次のような紹介文とともにインターネット上に短編映画が公開されている³⁾。なお、この短編映画の制作にも芸術人文研究審議会の助成金を使用したようである。

「この展覧会では、Robina Akhter Ullah、Shabana Baig、Fatimah Fagihassan、Aida Foroutan、Usarae Gulといった5人の現代アーティストの作品を、ウィットワース美術館のコレクションの中から選んだ作品との対話を交えて紹介します。アーティストの作品とストーリーは、彼女たちがアイデンティティ、信仰、文化、他者性、帰属といったテーマを探究する時に、ひとつにまとまります。この合同展では、アート空間やパブリックコレクションにおける包摂と排除をめぐる重要課題を探究しながら、重要であるにもかかわらず見過ごされてきたムスリム女性による、今日の英国における文化と芸術への貢献を紹介します」

それでは、5人のムスリム女性アーティストたちの作品とは、どのようなものなのか。英国で暮らすアジア系ムスリム女性アーティストとして、彼女たちはアイデンティティ、信仰、文化、他者性、帰属といったテーマを、どのように語るのか。同展のパンフレットに掲載された文章と展示物および掲示物に基づいて紹介していく。

Ⅲ. 5人のムスリム女性アーティストの作品展示

(1) Robina Akhter Ullahの語りと展示物

「私は記憶に関心があります。私たちはどのように記憶を創り出し、何を選んで残し何を選んで捨てるのか。私の作品の中心には、ばらばらになった記憶という観念があります。私の母と父がインドからパキスタン、そして私の母国である英国へと移動した時のことを、何時間にもわたって聞いていた時、そして私の宗教、文化、伝統が奇異な魅力をもつものとみなされるような場所でマイノリティとして育った経験から、その着想を得ました。

私は、ミュージアムやギャラリーは、ばらばらになった記憶の家であり、ある瞬間が保管され展示されるのだと思っています。それらは、コロニアルな過去と関連のある何を隠し何を記憶しているのかを示しています。

私は、儚い瞬間を捕らえるために、作品に写真を使っています。これらは、使用される全ての布片が作り手にとって重要な意味を有しているイングリッシュ・ペーパー・ピーシング（型紙を布で包み繋ぎ合わせる手法のパッチワーク）に再生されます。ひとつひとつのピースが、私たちが価値あるものとして選び、取捨選択された語りを統合し創った記憶を表象します。

私の作品は、伝統的なパキスタンのテキスタイル技術と英国のそれを使用することを通して、英帝国の影響と関連づけられます。私は、アートにおける女性の生彩の可視性について再考を求め、再定義し、意見していくことで、ステレオタイプの破壊に役立てることを望んでいます」

このように語る彼女の作品は、六角形のモチーフをつなぎ合わせたオブジェや、六角形のパターンが繰り返されるウォールペーパーなどである。また、彼女が展示ケースに入れるために持参した私物には、六角形のモチーフを描いたスケッチブックや、フェミニズム関連の研究書などがあつた。彼女が選んだ他のアーティストの作品は、作者不詳の六角形の布のパッチワークなどであつた。

(2) Shabana Baigの語りと展示物

「私はいつも家族の中の黒羊で、なんとなく外部者のようでした。当時の私は気付いていなかったのですが、テキスタイル・デザインの学位取得で、私はアートを通して自分自身を表現できるようになり、さらに自立できました。私の作品は、私を取り巻く文化の翻訳であり、80年代から90年代にかけての英国における第2世代のアジア系としての闘いです。

私はいつも、人びとの生は複合的で、剥ぎ取れる多くの層があると感じていました。私は追いつ立てられるように、私の作品の多くに彩色し隙間がなく描き込み重ね描きし精細に仕上げてきました。シンプルなデザインでは十分ではないと感じていたのです。

ひとりのムスリムとして、礼拝は常に私の生活の一部となっています。それは、イスラームが

私たちに与えてくれた最も大きなギフトだと信じています。それは私に中心と基盤を維持させてきました。礼拝用敷布は通常、模様がありカラフルです。それらの豊かで活気のあるイメージが私の作品に影響を及ぼしています。

卒業後、私はフリーランスのテキスタイル・デザイナーになり、そのあと職業を変え、25年以上、ヴォランティア・セクターで働いてきました。私は12年前にセラピストになるための訓練を受け、現在はグレーター・マンチェスター・レイブ・クライシスで働いています。私は、どのようにしてアートを幸福のために使うか、またトラウマ体験からの回復に役立てるかに関心をもっています」

このように語る彼女の作品は、黒インクとペンを使った繊細な線画や込み入ったデザインのカラフルな絵画などである。また、彼女が展示ケースに入れるために持参した私物には、スケッチブックやスクラップブック、そして南アジアのムスリム女性が好むドウパッターと呼ばれる大判のストールなどがあつた。彼女が選んだ他のアーティストの作品は、David Robertsというアーティストが1839年に描いたというカイロのフセイン廟の水彩画などであつた。

(3) Fatimah Fajihassanの語りと展示物

「私はマンチェスターで生まれ育ち、このたびイラストレーション課程を卒業し、フリーランスの写真家となりました。私は、リビア出身のムスリム移民とカトリックからイスラームに改宗した英国人ムスリムの娘です。これまで生きてきた中で、私はいつもムスリムとしてのアイデンティティをもっていたと記憶していますが、そのことが西洋世界ではたいてい私たちをアウトサイダーとして分類するのだと感じていました。

私は、この話をウィットワース・ヤング・コンテンポラリー・プログラムを介して参加している短編映画の中で紹介しました。映画で私は、若いクリエイターたちが自分たちの芸術性をいかに発見し、さまざまな困難な環境の中で成功を試みているかについて論じたのです。近年、私は自分のアート作品を介して、幼少期と家族に向けられた自分の思考を探究しています。大人になる前、私の母の過去は神秘のヴェールに包まれていました。現在のアートプロジェクトが始まるまで、私の家では、それは決して触れてはならない話題だったので。

私は、英国のムスリム女性、そしてヒジャーブをまとっている女性たちはなおさら、自分たちを無声にする国で育ち生活していると思っています。私は美術館でヒジャーブ姿の女性を見ると、(ヴェールという)壁の内側にいる彼女にはたいてい何もないと思っているため、いつも驚いてしまいます。

私は、また別のヒジャーブ姿の女性が美術館に来る理由を与える、このヒジャーブ姿の女性に敬愛の念を抱いています」

このように語る彼女の作品群に、頭部を布で覆った女性のモザイク画が数点あるが、それらは人々が中東のムスリム女性のステレオタイプだと感じている女性をイメージしてデザインしたもの

のだという。彼女が展示ケースに入れるために持参した私物には、リビア式の婚礼衣装に身を包んだ母親の写真が貼ってある古いアルバムなどがあつた。また、彼女が選んだ他のアーティストの作品は、Farouq Malloyという改宗ムスリム（元の名前はSean Malloy）がフェルトペンを使って描いた大胆な図柄のタイトルなしの絵画であつた。この作品について彼女は「Malloyは1990年代にイスラームに改宗した。たいてい、生まれた時からムスリムである人よりも、改宗したムスリムのほうが、何を以て信仰を实践するかについての考えが全く新しくて独創的である。私が思うに、信仰に関するこの特異な視座をもつ彼の作品は、（ムスリムの）コミュニティにとって不可欠な声を含んでいるため決定的に重要である。それこそ、ムスリム・アーティストたる意味を表象しているのだ」と熱いコメントを記している。

（４）Aida Foroutanの語りと展示物

「私は1976年にテヘランで生まれ、長く続いたイラン・イラク戦争の間、そこで育ちました。私は、アルザフラ大学の産業デザイン課程で画家としての訓練を受け、卒業したのですが、アートに関する事情のため2000年にスウェーデンに移動し、劇場や美術館のキュレーションの仕事をしました。2007年に、マンチェスター大学の演劇学修士課程で学ぶために英国に移動し、そのあと「イランの芸術と文学におけるシュールレアリズムの受容」という論文名で美術史の博士号を取得しました。

私は活動するアーティストとして、また美術史家として、女性の表象を研究しています。私の作品の多くは、イランで女性がどのように人生を経験しているかという問題を、ダイレクトに語っています。『女性の人生』シリーズは、そこでの、そしてあらゆる場所での女性の権利のための闘いを描いた28枚の油彩画で構成されています。私は、女性たちの物語や経験に耳を傾けながら、異なる角度から、人生の異なるステージにいる女性を見ています。個々の油彩画は、誕生から死別、そして自分の死といった人生のドラマにおける要素を表しています。

私はこれまでに多くの研究論文を発表し、2018年にはマンチェスター市のジョン・ライランズ図書館で『古典ペルシアの過去の影の中の現代イランの芸術と建築』という盛大な国際会議を主催しました」

このように語る彼女の作品は、彼女自身が語っているように「女性の人生」シリーズのうちの数枚などであり、展示ケースに入れるために持参した私物はアコースティックギターであつた。彼女が選んだ他のアーティストの作品は、作者も年代も不詳のペルシア細密画などであつた。彼女は、自分の作品が、細密画の技法に影響を受けていると記している。

（５）Usarae Gulの語りと展示物

「私は2013年にマンチェスター大学のテキスタイル・デザインとデザイン・マネジメントの課程を卒業しました。それ以来、私はテキスタイル・プリント・デザイナーとして働いていて、最

近はロンドンを拠点にしています。

私個人のアートにおいて、私は自身のアイデンティティがある世界と仕事の世界の両側から対象を結び合わせ、パキスタンにルーツがある私が大きな影響を受けた色と図案に溢れた、人目をひくイメージを創り出すことが好きです。私は特に、英国内部の移民文化のポケットに魅入られていて、移民第1世代の間での二重のアイデンティティの経験を探究してみたいです。

私は自分のアイデンティティを明確にするため、混乱させられてもいいことを確信するため、2つの別々の衝突する文化の部分であるために、そして自分自身を英国のパキスタン系女性として褒め称えるために、作品を創っているのです。パキスタン系移民の両親の娘として、私は豊かな伝統と、生育環境のダイバーシティを愛しています。私は、それに非常に感謝しています。私の絵は、私の二重の伝統の賞揚なのです。

私たちは家庭で話されるウルドゥー語と英語で育ち、しばしばハイブリッドなウングリッシュを話します。私は、『私はウングリッシュです』という言葉が、私のアイデンティティを最も的確に表現していると思っています」

このように語る彼女の作品は、鮮やかな色彩が特徴のポップな絵画が中心である。描かれているのは、地元カレーマイルのカバブ屋やパキスタン・スイーツの店などである。パキスタン・スイーツの中でも、彼女が最も好きなのは、熱々のジャレービーと甘いミターイーだという。持参した私物は、パキスタン訪問時にプレゼントされた革製の民族靴5足であり、膨大な個人コレクションの一部だという。展示室の端に置かれ「ハッピーボックス」という説明が付された木箱は、イングランドの某所で拾ったものをペンキで塗って見栄えをよくし、パキスタン系英国人という彼女の2重のアイデンティティを表現するように仕上げたオブジェである。そして、彼女が選んだ他のアーティストの作品とは、19世紀から20世紀前半の植民地インドで作られたと思われる作者不詳の綿布や豪華な刺繍の入ったシルクのジャケットなどであった。

IV. ムスリム女性アーティストのエンパワーメントに向けて

ここまで見てきたように、ウィットワース美術館の「信仰を越えて」展ではムスリム女性アーティストの作品が、彼女たちの私物やお気に入りのアーティストの作品とそれについてのコメント、さらに生い立ちに関する語りなどとともに展示されていた。「ストーリーの過剰」とも言える展示内容を、私たちはどのように解釈すればよいだろうか。重要な手がかりは、やはり、この合同展がアーティストと研究者の協働による参加型アートないしソーシャリー・エンゲージド・アートのプロジェクトだという点だろう。エルゲラは、次のように述べている。「コンテンポラリー・アートでは、一般の人々の声が失われていることが多い。アーティスト、キュレーター、評論家の声が重要視されているように見える。しかし、参加者グループの体験が作品の核心になっているプロジェクトでは、参加者の反応を記録しないのは片手落ちだろう。これらの人々が、人

生観が変わるような体験を得たとすれば、その体験を描写、説明する役割は、アーティストでも批評家でもキュレーターでもなく、彼ら自身に委ねられるべきだ。引き換えに、評論家は自分自身が能動的な参加者である場合以外は、体験の第一次記録者ではなく、記録を解説する役割を果たすべきである」(エルゲラ2015: 147-148)。

つまり、「ストーリーの過剰」は綿密に計画され実行された結果であり、プロジェクトの過程においても強く意識されたのである。このことは、展示室とパンフレットの文章からもうかがえる。すなわち、「自分自身の声で話しながら、彼女たちはアイデンティティ、文化、他者性、帰属、そして信仰を越えて合同の作者性を創出するというテーマに取り組んだ」。より一般的な参加型アートないしソーシャリー・エンゲージド・アートと、このプロジェクトの違いは、キュレーターの役割を担う研究者が、一般の参加者の役を引き受けたアーティストたちの声に注意深く耳を傾け、どんな小さな声も失うことがないように丁寧に記録したことであろう。その結果が「ストーリーの過剰」という実を結んだのである。「ストーリーの過剰」には、また別の効果もあった。観客が作品を鑑賞して自由に想像する余地をなくすという効果である。展示室では、あらゆる場所にアーティストの語りがちりばめられているため、作品や事物の解釈に生真面目に取り組む観客ほど、掲示された文章に集中し感情移入する。それによって自由な解釈は難しくなり、アートプロジェクトの主催者と参加者の意図に、従順に共鳴することになるのである。

つぎに、このプロジェクトの狙いについて考えたい。再び、展示室とパンフレットの文章を見ると、ムスリム女性に対するネガティブなイメージを払拭し、「英国の文化創造産業におけるムスリム女性の役割や経験を探究しつつ」、「表象や美術界の排他性についての重要な問題を提起する」こと、「社会的不平等に挑み過小表象されている人びと」、ここでは、すなわちムスリム女性アーティストに対して、そのエンパワーメントを狙っていることが分かる。大学で美術を専攻し卒業しても、美術品の市場価値システムに鑑み、成功する可能性が乏しいマイノリティ女性アーティストに対して、何らかのきっかけやチャンスを与えることが、このプロジェクトの狙いである。ビショップによれば、英国では「1970年代と80年代当時、周縁社会に生きる人々（労働者階級、少数派の外国人、女性、性的少数派など）による文化、また彼らのための文化を財政援助するという考えは、馬鹿げており当然クオリティに欠けるとして、支配層から問答無用に一蹴」されていたのだから(ビショップ 2016: 295-296)。

最後に考察したいのは、筆者にとって最も解釈が難しかった企画展のタイトルについてである。いったい誰が、どのように「信仰を越えて」いるのか、いないのか。プロセスを重視するアートプロジェクトにおいて、キリスト教徒の研究者とムスリムであるアーティストの間で、あるいは多様な背景と経験をもつムスリム女性アーティスト間で、信仰を越えるという目的が達成されたのか。ここで、前述の「自分語り」を振り返ると、ムスリム女性アーティストは誰一人として信仰を越えたとも越えたいとも語っていないことに気付く。むしろ、イスラームを信奉し、ムスリムであることを誇りに思い、宗教の枠内で創作活動をおこなうことを望んでいるように感じる。

それでは、誰が信仰を越えたのだろうか。

これに関しては明示されているわけではないのだが、筆者は、キュレーター役の研究者や、展覧会を訪れる一般の観客が、非ムスリムという信仰を越えてムスリム女性アーティストに歩み寄ったのだと推測する。このアートプロジェクトでは、多文化主義の理想としてホスト社会ないしマジョリティの側が、マイノリティに寄り添うという美しい物語が映し出されていると考えるのである。その証拠として注目したいのが、彼女たちのルーツを可視化する私物であった。それらは宗教や民族を想起させるものばかりであり、それを通じてアーティストの文化が展示され、彼女たちの揺るぎないアイデンティティも大きな声で宣言されたのである。

V. おわりに

本稿では、マンチェスター大学ウィットワース美術館で開催された「信仰を越えて」展の展示内容について考察した。おわりにあたって、英国で美術教育を受けたムスリム女性アーティストが、ムスリム女性アーティストとして作品を制作し展示し、それについて語ることの意義について検討したい。キューバの現代アーティスト、タニア・ブルゲラは、細谷のインタビューに応じて次のように語ったという。

「現代のアーティストにとって最大の危機は、ローカルなアーティストから国際的なアーティストに移行するとき存在すると考えます」。「ローカルなレベルにおいて、アーティストは具体的な状況におけるコンセプトや感情に基づいて作品を制作します。しかし、グローバルな場においてはそうはいきません。文脈が存在していません」。では、どうするのか。それには「いくつかの選択肢」があるという。「自分自身の出身の場の独自の資源とその文脈を用い続けつつ、実際には文脈を失い形式化していくこと。そして往々にしてコンセプチュアル・アーティストに、つまりメッセージ性がある形式主義になっていきます」。「もう一つの選択肢は、従来のテーマを捨て、同じシステムから構成されるメタファーを用いて、作品において新たなテーマを扱うというものです。これはある程度成功しますが、しかし、エキゾチックな要素は薄まっていきます。ただ、いずれにしてもエキゾチックであることには変わりないのです。私たちは中心にいる人からみれば周縁的位置にあり、中心に行き英語を話す余所者なのです」（細谷 2014: 142-145）。

ブルゲラの語りを受けて、細谷は次のように論じる。「第三世界から現代美術の世界への参入の仕方の一つとして、ローカリティを用いる戦略がある。しかし、ローカリティは、あくまで欧米の美術史の展開の文脈のなかに位置づけられた場合のみ、意味を構成する。つまり、ローカリティそのものではなく、異文化（西欧文化）の文脈を前提に構築されたローカリティである」。「異質性、ローカリティを用いる根底には、一見逆説的にみえるが、ゲームの規則の共有がある」からである（細谷 2014: 145-146）。

細谷の議論に依拠すれば、「信仰を越えて」展の5人のアーティストは、今回の合同展でアジ

ア系のムスリム女性というエキゾティシズムを背負わされることになった。実際には、彼女たちはアジアで暮らすムスリム女性よりもはるかに西欧化した思考と振る舞いを身につけているに違いない。しかしながら、英国でアーティストとして成功しようとするなら、ブルゲラの経験が示唆するように、最も近道なのは戦略的本質主義的に欧米のアーティストとの差異を維持し続け、アジア系ムスリム女性であることを前景化した創作を続けることになるのである。

(こまき さちよ・高崎経済大学地域政策学部教授)

参考文献

エルゲラ、パブロ（著）、アート&ソサイエティ研究センター SEA研究会（訳）2015『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門：アートが社会と深く関わるための10のポイント』フィルムアート社。

クリフォード、ジェイムズ（著）、太田好信・慶田勝彦・清水展・浜本満・古谷嘉章・星埜守之（訳）2003『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院。

ビショップ、クレア（著）、大森俊克（訳）2016『人工地獄：現代アートと観客の政治学』フィルムアート社。

細谷広美2014「コモディティ化するフェティシズムへの挑戦：社会主義国キューバのアーティスト、コロニアリズム、グローバル市場」田中雅一（編）『フェティシズム研究2 越境するモノ』京都大学学術出版会、pp. 121-152。

鷲田めろ2009「アートプロジェクトの政治学：『参加』とファシズム」川口幸也（編）『展示の政治学』水声社、pp. 237-272。

Werbner, Pnina 2002 *Imagined Diasporas Among Manchester Muslims: The Public Performance of Pakistani Transnational Identity Politics*. Oxford: James Currey Publishers.

注

- 1) マンチェスターのパキスタン系ムスリム社会の様子は、Werbner（2002）に詳しい。
- 2) ウィットワース美術館のホームページで展覧会のアーカイブを見ることができる（<https://www.whitworth.manchester.ac.uk/whats-on/exhibitions/pastexhibitions/beyondfaith/>、2020年8月15日閲覧）。
- 3) 次のサイトで短編映画を視聴することができる（<https://vimeo.com/343988287>、2020年8月15日閲覧）。

謝辞：本稿はJSPS科研費（JP15K03047およびJP16H01969）の助成を受けて実施した調査研究成果の一部である。